

立正大学 榊

史料編纂室の

vol.04

第4号 2018年3月

齊藤 司 氏 (横浜開港資料館主任調査研究員)

「地方自治体における市史編纂と資料の保存・公開 —横浜市・横浜開港資料館の事例—

【第4回立正大学史料編纂室主催講習会・講演要旨】

2017(平成29)年7月7日、立正大学品川キャンパスにおいて第4回立正大学史料編纂室主催講習会が開催されました。今回は講師として齊藤司氏(横浜開港資料館主任調査研究員)をお招きしました。以下では、その講演要旨を掲載いたします。詳細な講演記録は『立正大学史紀要』第4号(2018年3月刊行予定)をご参照ください。

1. はじめに

私は、立正大学を卒業した後、調布市の市史編集室勤務を経て、横浜市ふるさと歴史財団に勤務することになりました。この財団は、横浜市歴史博物館を開館するのに伴い、横浜市が開設した外郭団体です。現在の勤務先である横浜開港資料館も含めて、横浜市の歴史・文化財を保存・管理・収蔵する諸施設については、市の外郭団体によって運営されています。

博物館は日本経済の発展に伴って相応に発展しましたが、バブル以降は予算と人員をいかに維持していくかということが現場の課題となっています。今回は、こういった時代の変化の中で、現場の専門系職員がどのように考え、感じているのかについてお話ししたいと思います。

2. 横浜市について

横浜市は人口370万人で18の行政区があり、政令指定都市では人口が一番多い自治体です。江戸時代は、幕府領と旗本領が多く存在し、東海道の大きな宿場もありました。幕末の1859(安政6)年に横浜が開港し、全国各地から商人が集まり横浜とその市民が形成されていきます。中心地は関内で、国の税関、神奈川県庁、横浜市役所、そして私の勤務先である横浜開港資料館があります。

横浜スタジアムから大栈橋に向かって伸びるのが日本大通りで、その東側(山手側)が開港以後の外国人居留地になります。それに隣接して中華街があります。その後、山手の丘陵まで居留地が拡大されます。これに対して、日本大通りの西側(野毛側)が日本人の居住区域となります。開港期には派大岡川という河川があり、その橋の場所に関門があったので、関門の内側という意味で関内という地名が生まれました。

横浜の近代史において画期となる事柄であり、現在の歴史認識や資料保存について一番大きな影響を与えているのは、1923(大正12)年9月の関東大震災と1945(昭和20)年5月の横浜大空襲です。当時の写真を見ると両方とも当時の横浜の中心部はほぼ壊滅状態でした。このため行政文書がほとんど残っておらず、こ

れが横浜市に公文書館ができないひとつの要因ではないかと考えています。

3. 第1次横浜市史編纂事業

横浜市や横浜市民が初めて自分たちの歴史を意識するようになったのは、1909(明治42)年の開港50周年祭でしょう。この時に横浜の市歌と市章が制定されました。市歌の作詞は森鷗外で、日本一古い市歌です。こうした共通のシンボルが作られるようになってきました。

この頃に第1次の横浜市史編纂が行なわれていきます。これは『横浜市史稿』といい、全8編の10巻本で、索引と附図が付いています。この中には教会編がありますが、横浜の特色だと思います。これらは開港60周年と市制施行30周年を記念して編纂されました。原始古代から編纂が終わる1933(昭和8)年まで執筆していて、開港期から大正期に重点が置かれており、事項別の編集となっています。この過程で1923(大正12)年に関東大震災が起き、これまで収集した資料を悉く焼失してしまいました。翌年から改めて資料を筆写する写本が作成され、現在、「市史稿写本」という名称で横浜開港資料館が所蔵・公開しています。

この間、市域の拡張が行なわれ、東海道本線から磯子周辺の範囲が横浜市域に編入されます。あわせて鶴見・神奈川・保土ヶ谷・磯子・中区の5区が成立します。これによって市史編纂の対象範囲も拡大されます。戦後、後述する第2次の市史編纂事業である『横浜市史』や『神奈川県史』の調査が行なわれますが、最初の市史編纂事業である『横浜市史稿』の段階で資料の調査・収集を行なっ



た先述の5区と、これ以降に横浜市に編入された5区以外の市域では、資料収集の度合いについて差があります。これは、先行業績を前提にできる部分と、そうしたものがなかった部分とのギャップが理由です。

開港に匹敵する横浜の歴史の大きな断層が関東大震災ですが、その時に自分たちが戻るべきものは何なのか。そういう事態が歴史や地域という意識や認識を再確認するきっかけになったのでしょうか。

4. 第2次横浜市史編纂事業

第2次の編纂は、『横浜市史』と通称されるものです。開港100年を記念して実施され、原始・古代から関東大震災の復興期までを対象としています。中心となる時代は開港から関東大震災で、この点については通史編と資料編の構成に如実に現れています。『横浜市史』の編纂計画は郷土史の流れとは別に、経済史的に国際貿易港としての横浜のあり方を強く出しています。マイクロ写真による撮影、紙焼と引き伸ばし、製本といった資料収集の方法が実施され、より多くの関係資料が収集されました。『市史稿』の編別構成が項目ごとになっていたのをやめて、編年史的に組んで全体の歴史の流れを浮かび上がらせており、また、日本史全体との有機的な連関を強調しています。この段階に収集された資料は膨大で、それが開港資料館開館時における中核的な資料のひとつになっています。

5. 第3次横浜市史編纂事業

第3次の編纂は、『横浜市史Ⅱ』です。昭和初期の関東大震災の復興過程が対象時期の起点になります。皆さんがご存知の山下公園は、関東大震災で出た瓦礫を埋め立てて作った場所で、この山下公園で震災からの復興祭を1935（昭和10）年に実施していますが、その復興期から高度経済成長期までを扱っています。

残念ながら、これ以降の市史編纂はいまのところ計画されていません。戦後に行なわれた第2次・第3次の市史編纂の計画は、対象の下限となる時期まで行ない、収集した資料を関連の施設で管理し保存・公開するという資料の収集・保存・公開という一定のサイクルと、10年・20年経った後に改めて次の市史編纂が実施されることを想定して資料を収集・保存しておくように考えているのですが、現実にはなかなか難しい状況です。

6. 横浜開港資料館について

横浜開港資料館は、神奈川県庁から日本大通りを挟んだ場所にあります。1854（嘉永7）年のペリー再来航時に日米和親条約を締結した場所が神奈川県庁周辺とされていますので、開港資料館の所在地がペリーの上陸地点ということになります。現在、これを記念して隣接した場所が「開港広場」になっています。

横浜開港資料館の建物は、旧館と新館から構成されています。敷地へ入る正門は海岸通りに面していますが、東門はかつての居留地の側に面していますので、正門的な雰囲気です。西門が日本大通り・県庁の側になります。旧館は旧英国総領事館の建物をそのまま使っており、守衛所を含めて文化財に指定されています。現在、記念ホールは通年で、旧領事執務室である記念室は年に1カ月ぐ

らい、6月2日の開港・開館記念日前後の期間に公開しています。

新館は開港資料館をつくる時に新しく建てた建物です。地下に閲覧室、1階に展示室Ⅰ、2階に展示室Ⅱ・Ⅲがあります。展示室Ⅰの入口には大きな地球儀があります。2階の展示室Ⅱの床は関内と横浜港の地図になっています。

横浜開港資料館は1981（昭和56）年6月2日に開館しました。6月2日は横浜市では開港記念日になります。管理団体については開港普及協会という団体を新規に設置し、市長部局に属していました。開館時の案内本によれば、「日本の開国、横浜の開港を中心とする歴史的な資料を収集・保存し、併せてこれらの資料を調査・研究・展示・公開するための文化施設」、また「市民に利用される施設であり、横浜の歴史のシンボルとして位置づけたい」と初代館長の遠山茂樹先生（元横浜市立大学名誉教授）が書いております。

第2次の市史編纂事業が終了する段階で、横浜開港資料館の開館が計画されています。『横浜市史』編纂の過程で収集した膨大な資料を管理・保存・公開するとともに、それ以降の調査研究の拠点というイメージだと思います。収集資料には、外国人居留地との関係によるイギリス・アメリカといった各国の政府・外務省・個人の文書といった海外資料、主要な輸出品であった生糸の関係による群馬県・長野県・埼玉県北部といった生糸生産地関係の資料などがあります。マイクロ撮影による写真として収集しただけでなく、生糸生産地については原資料も収集されています。

横浜開港資料館が建てられた当時の大きな特色は閲覧室の存在です。まず横浜開港などに関する基本図書は、開架の書棚で閲覧が可能になっています。それから館所蔵の歴史資料、国内外の資料、横浜に関わる古写真・浮世絵・絵葉書等のデータを閲覧できます。もうひとつ重要な要素は調査研究員です。閲覧室で質問をすると、専門の調査研究員がレファレンスをするのです。このほか館主催による講座・講演会の開催があります。

今の段階で当時の機能を整理すると、アーカイブズ（文書館）、ミュージアム（博物館）、ライブラリー（図書館）、講座や講演会の開催等の公民館的機能の4つがあります。こういった総合的な施設として横浜開港資料館をつくったということです。非常に先駆的かつユニークであったと思います。

所蔵資料については、開館時に7万点で、2016（平成28）年度末の段階で26万8,000点に増えています。文書記録類は、諸家文書、館蔵諸文書、市史稿の写本、歴史的な公文書、海外資料に分かれます。それから行政資料、新聞・雑誌、文献資料（和図書・洋図書）、画像資料（瓦版・浮世絵・写真・芝居番付・絵画・絵葉書・商標類）。日本でも有数のコレクションでしょう。それから地図と図面類があります。設計図面は横浜の都市の構造物に関する図面類です。個人コレクションもあります。資料収集の方法としては、寄贈・寄託・購入という原資料での受け入れと、マイクロ撮影になります。

やはりいろいろな状況が大きく変わったのは今から15年か20年ぐらい前になるでしょうか。バブルが崩壊して次第に財政が悪化していき、資料収集が困難になりつつあります。また、人員の不足でレファレンスの業務負担も大きくなっています。こういった中で今後の課題は、時代への変化にどう対応していくかということに尽きると思います。ありがとうございました。

戦前の偉容再現

立正大学史料編纂室専門委員（本学経済学部准教授） 平 伊佐雄

立正大学史料編纂室では、大学の記録となる資料を収集・保存、そして利用するための作業を日々行っている。大学に残されているものの、まだ整理されていない資料に符番して整理し、利用

に供するための作業もそのひとつである。その作業の中で興味深い内容を持つ資料を見つけた。おそらく、この資料はかつて『立正大学の120年』を編集・刊行するために集められた資料のひとつ

つだと推察されるのだが、今回は、その一部を取り上げて紹介してみたい。戦後の校舎復旧に関する記録である。

第二次世界大戦末期、立正大学は東京空襲によって施設の多くが被災した。戦後、その形をとどめていたものは、大学本館、平屋の付属室、図書館、同付属室、中学の校舎、正門、通用門、水泳場の8施設のみであったと推察される。1945（昭和20）年3月末日の「財産目録」の「二 建物」によると、当時の立正大学には、大学校舎（鉄筋三和土三階建）、同付属室（木造平屋）、図書館（鉄筋三和土三階建）、同付属室（木造平屋）、柔剣道場（木造平屋）、運動具庫（木造平屋）、銃器庫（木造防空造二階建）、学生控室（同）、便所（同平屋）、弓道場（木造平屋）、中学校校舎（鉄筋三和土三階建）、同付属室（木造二階建）、同付属室（同）、雨天体操場（同）、寄宿舎（同）、同礼拝堂（同）、正門（コンクリート）、通用門（石柱）、水泳場（コンクリート）を有していたことが解っているので、上記の8施設以外は焼失したことになる。焼失した大学の建物については、1948（昭和23）年中に作成された「私立学校建物戦災復旧計画書」の諸資料からもそれらを裏付けることができる。

戦争が終わり、学生も大学に戻るとい状況にあって、寮もなければ校舎も不足する事態に大学もその対応に追われたに違いない。現存する資料を確認しても、その記述に誤記と思われる部分や訂正も多く、なかなか正確な情報をつかめないのだが、財団法人立正大学理事会の決議書などを利用し、解る範囲で建物復旧の様子を整理してみると、以下ようになる。

復旧の手順としては、全焼しなかった校舎を補修、同時に仮校舎の建設、新校舎の建設と、毎年、計画を確認しては復旧工事を進めたと考えられる。1945（昭和20）年11月28日の理事会では、早速、校舎復旧に関して話し合われ、その決議書には「校舎復興用資材トシテ日本光学所有二階建延坪四百坪ノ建物ヲ拂下ゲ之レニ充当スルコト右資材の価額ハ木材約五万円 瓦 壹万式千円（一枚一円割）ガラス戸壹万式千円程度 校舎建築ニ関シテハ中学校及大学、何レヲ先ニ着手ベキカ経費予算ノ関係上具体案提出ノ上審議スルコトトシ次回の理事会ヲ十二月三日開催ノコト」と記録されている。この件は、12月の理事会で決議され、さらに中学移転の場合とこのまま現地に再建する場合の予算の配分を決めている。

大井町や川崎に大きな工場を持っていた日本光学工業（現ニコン）からの払い下げ建築材については、1958（昭和33）年頃の記録ではあるが、当時の望月学監が「ある工場の寮として使っていたものを中学校に移築したのであって、もう大部痛みましてほとんど二階の方は危険を感じなくなった」と発言しているので、実際に中学校の校舎建設に利用されたと思われる。『日本光学工業株式会社四十年史』にも、戦後、日本光学工業の再建にあたり、工場の土地建物を整理処分し、払い下げを行ったことが叙述されている。しかし、立正大学への売却については、かなり早い時期での売却のはずであったが、記載がなく、残念である。

1946（昭和21）年1月21日の理事会では、立正中学校と立正大学の復興予算について話し合われ、校舎木造二階建延べ450坪（66万8,833円）と大学講堂の建築工事（70万円）に関する予算措置についての決議がなされた。結局、増築に関しては、中学の校舎を優先したと推察される。1945（昭和20）年度中に既存の校舎の設備を補修し、1946（昭和21）年11月には、新築で中学校校舎（仮校舎）と木造の水洗式便所を設置した。1946（昭和21）年の8月25日の理事会決議では、二カ年計画で20教室を設置する立正中学校の第二期工事計画が承認されている。木造二階建の8教室（247坪）、中学校校舎の建設である。竣工は、早くても1947（昭和22）年の9月以降であると推察される。同年に新制の中学校が開校されたことから、これらの学制の変更に伴う対応であったのだろう。1946（昭和21）年の当初から計画されていた講堂の建築は未だ進展していない。



1951（昭和26）年頃の立正大学配置図（国立公文書館所蔵）

1947（昭和22）年度の大学の学生数は、1948（昭和23）年の1月末日の段階で、文学部218名、予科189名、専門部578名の合計985名であった。なお、1947（昭和22）年の8月には、隣接の土地285坪を買い受けている。

大学の校舎新築は、中学校の校舎に次いで建造された木造二階建ての校舎（257坪）が最初である。1948（昭和23）年度の計画で施行され、1948（昭和23）年12月には完成したと思われる。この大学校舎の新築については、立正大学新聞部発行の『立正大学新聞』が「大学新校舎落成す」と題して1面に掲載し、1949（昭和24）年の1月13日に落成式を挙行したことを報じている。悩ましいことは、この大学新校舎についての詳細は、他の建築物もそうであるように、例えば坪数は、計画では257坪、後の財産目録や資産報告書には255坪・244坪と記載されており、その表記がまちまちであることである。1951（昭和26）年の品川区役所建築課による証明では、247坪となっている。

同年の2月には、木造平家の大学食堂（15坪）と同売店（8坪）も完成している。1949（昭和24）年に新制大学としての出発を図った立正大学は、1950（昭和25）年度の復興事業として、教授の個別研究室、図書館閲覧室の建築を計画し、1950（昭和25）年6月に竣工を見た。大学研究室は木造二階建て（88坪）、図書館閲覧室も木造二階建て（41坪）である。同時に木造平家の大学宿直室（16坪）も設置している。同月の30日には、高等学校の新校舎、木造二階建て（385坪）を竣工させた。

大学復興の勢いは、1950（昭和25）年の春に山手通りに直結できる隣接地（1,200坪）と建造物を購入していることからわかる。当時の『立正大学新聞』、財団主事の太田氏へのインタビューの記事には「さしあたって現在中学で使用している平屋の校舎を移転して、100人は収容できる寮を設ける予定、なお、建造物の5個は売却して建築費に当てようと思う」とある。その後、平屋の中学校校舎は取り壊され、無くなっている。

1954（昭和29）年3月には、鉄筋コンクリート造平屋建ての体育館兼講堂（223坪）が竣工し、1955（昭和30）年9月からは、大学本館に連ねて増築する鉄筋コンクリート造三階建ての校舎を着工、1956（昭和31）年4月12日には完成している。さらに学園施設の拡充は進み、戦後10年と少して「戦前の偉容再現」を成し遂げたようにも見える。この間には、石橋湛山が学長に着任し、さらには首相にも就任したため、誰もが立正大学のさらなる発展を期待したであろう。しかしながら、既に新校舎落成の報を伝える大学新聞ですら、当時の大学復興に危機感を抱く論説も現れ、大学の経営に懸念を感じていた。実際、多くの負債を抱えた財団は、1952（昭和27）年には財政的なピンチに見舞われ、大学財政の立て直しのために、石橋湛山学長や森嶋理事長をはじめとする外部の人たちの大学への着任が必要となったのである。森から理事長を引き継いだ沖鳳亀は、「立正大学の現況報告」の中で当時の負債の理由として、復興のための施設の新設、新制大学と定められるための施設条件

拡充、負債の整理、俸給の引き上げ、学生数の低下を挙げている。
戦後、めまぐるしく校舎を建て替え、負債を抱えながらも谷山の校舎は確かに復旧した。その後も財政危機に見舞われるものの、この谷山の地は、現在に至ってまで品川キャンパスとして存続している。1904（明治37）年にここ谷山に居を構えてから113余年、今後も大切にしていきたい地である。

最後に、先の痛んだ校舎についての報告には、後のくだりがあるのでそれを紹介して終わりにしたい。「本年から中学・高校の生徒1人が、毎月300円ずつ積み立て、年に500万円を出し校舎を建てる計画を進めている」とある。うどんやラーメンが1杯35円程で食べられた時代である。学校運営に関して、いろいろと考えさせられる現況報告である。

立正大学史料編纂室の展示について

立正大学史料編纂室の展示は、2014（平成26）年7月のオープンキャンパスから始まりましたが、これは「オープンキャンパスに来てくださる高校生とその保護者の皆様に、本学の150年に及ぶ歴史をご理解いただく」という思いから始められたものです。このときから、ホームカミングデー展示、入学式展示、企画展と、展示の種類も少しずつ増えてゆき、現在では春夏秋冬のシーズンごとに展示が開催できる体制が整ってきました。今年度の企画展までに開催された展示は32回を数え、来場者は2,015名以上になります（年間およそ500名）。

当初は、オープンキャンパスを中心とした展示を設計していたため、大学全体を象徴する意味で校舎の変遷をテーマとすることが多かったのですが、徐々に歴代学長、学園祭等（橋花祭・星霜祭・体育祭）、熊谷キャンパス50周年記念、卒業アルバムのイラストマップとテーマの幅を広げてきました。

ここではオープンキャンパス展示について説明いたします。およそ20～30枚の写真パネルを準備して、来場者の方が5～10分程度ですべての写真をご覧いただけるようにしているのが特徴です。専門員や職員は、展示されているパネルについて説明ができるように予習しています。2015（平成27）年度からは展示台も

導入し、これまでは石橋湛山学長関連史料（学園新聞や冊子記事等）、学生生活用品（バッジやテレホンカード等）、東都大学野球優勝時の硬式野球部グッズ（サイン入りタオルやメガホン等）、日蓮宗大学関係史料（教務日誌等）を展示しました。また、『写真で見る立正大学の歴史』など、本学の歴史を短時間でご理解いただくための冊子やリーフレットを配布しています（これは、高校生やその保護者に好評です）。記念品も配布しています。

今後は、展示の質をさらに高めることが目標ですが、それには新たな予算も必要になってくるでしょうし、そのコストに見合った成果を上げていることを証明していかなければならないとも思います。こういった難題を抱えつつも、大学史料編纂室では「今日は、こんな史料を見つけた!」「意外なエピソードが史料のなかに書かれてあった!」などと、毎日新しい発見に沸きかえっており、実はこのような楽しい雰囲気を何とか皆様にお伝えすることこそ一番の役目なのではないかと考えています。こういった日々の積み重ねによって立正大学の歴史がきちんと後世に継承されていくことを願いながら、つぎの展示計画を練るのでした。

（文：編集担当 K）

過去の展示一覧

年度	西暦	展示名	日時	場所	来場者数	タイトル	内容
平成 26	2014	オープンキャンパス	7月27日	品川 6号館 B1 階ドール前	12	りっしょう物語—写真でみる立正大学のあゆみ	キャンパスの変遷についての写真パネル
			8月3日	熊谷 アカデミックキューブ2階エレベータホール前	61		
			8月17日	熊谷 アカデミックキューブ2階エレベータホール前	64		
			8月23日	品川 5号館 51B 前廊下	74		
			8月24日	品川 5号館 51B 前廊下	69		
		[パネル貸出] ホームカミングデー	11月2日	品川 9号館学生広場	—		キャンパスの変遷についての写真パネル
平成 27	2015	入学式	4月1日	熊谷 ゲートプラザ1階正面玄関右脇	51	りっしょう物語—写真でみる立正大学のあゆみ	キャンパスの変遷についての写真パネル
			7月26日	品川 5号館1階資料配布コーナー奥	98	写真で見る立正大学の歴史	キャンパスの変遷についての写真パネル
		8月2日	熊谷 アカデミックキューブ2階エレベータホール前	46			
		8月16日	熊谷 アカデミックキューブ2階エレベータホール前	76			
		8月22日	品川 5号館1階エントランス	93			
		8月23日	品川 5号館1階エントランス	100			
		ホームカミングデー	10月31日	品川 9号館1階エントランス	70	写真で見る立正大学の歴史	キャンパスの変遷についての写真パネル
企画展	11月2日～30日 12月3日～19日	品川 5号館1階エントランス 熊谷 アカデミックキューブ1階エントランスホール階段下	—	立正大学をつくった人びと—学長篇	歴代学長肖像写真パネル		
平成 28	2016	入学式	4月1日	熊谷 アカデミックキューブ1階正面入口	100	写真で見る立正大学の歴史	キャンパスの変遷についての写真パネル・歴代学長肖像写真パネル
			7月24日	品川 524 教室	80	写真で見る立正大学の歴史	キャンパスの変遷についての写真パネル
		8月7日	熊谷 アカデミックキューブ2階エレベータホール前	45			
		8月20日	品川 523 教室	36			
		8月21日	品川 523 教室	128			
		8月27日	熊谷 アカデミックキューブ2階エレベータホール前	23			
		ホームカミングデー	11月5日	品川 9号館1階エントランス	97	写真で見る立正大学の歴史	橋花祭・星霜祭・体育祭についての写真パネル
企画展	11月2日～30日 12月3日～19日	品川 6号館 B1 階 RILLPort インタラクティブポート 熊谷 アカデミックキューブ1階アトリウム	—	立正生活—写真で見る大学祭と体育祭	橋花祭・星霜祭・体育祭についての写真パネル		
平成 29	2017	入学式	4月1日	熊谷 アカデミックキューブ1階正面入口	135	写真で見る熊谷キャンパスの50年	熊谷キャンパスの変遷についての写真パネル
			7月17日	品川 5号館1階資料配布コーナー奥	101	写真で見る立正大学の歴史	キャンパスの変遷についての写真パネル
		8月6日	熊谷 アカデミックキューブ2階エレベータホール前	91			
		8月11日	品川 5号館1階資料配布コーナー奥	114			
		8月12日	品川 5号館1階資料配布コーナー奥	96			
		8月20日	熊谷 アカデミックキューブ2階エレベータホール前	94			
		ホームカミングデー	11月4日	品川 9号館1階エントランス	61	Out of Campus—卒業アルバムにみる五反田・熊谷いらすとまっふ	卒業アルバムのイラストのパネル
企画展	11月2日～12月2日	品川 6号館 B1 階 RILLPort インタラクティブポート	—	写真で見る熊谷キャンパスの50年	熊谷キャンパスの変遷についての写真パネル		

*企画展では展示解説を行っていないため、来場者数をカウントしていません。



立正大学史料編纂室の葉 第4号

発行日：2018年3月1日
編集発行：立正大学史料編纂室
編集代表：平 伊佐雄（専門委員・広報担当（本学経済学部准教授））
〒141-8602 東京都品川区大崎 4-2-16
TEL. 03-3492-2690 FAX. 03-5487-3339